研究資料

オリンピア遺跡と古代オリエントのスポーツ

Olympia and Sports of the Ancient Orient

沼本　宏俊

Hirotoshi NUMOTO

はじめに

近代オリンピックの原点回帰2004アテネ大会を一年後に控えた８月末に、古代オリンピックの発祥地として知られているギリシャのオリンピア遺跡を訪ねた。言うまでもなくオリンピアは、古代のスポーツ競技や古代ギリシャ・ローマ史を語るうえで不可欠な遺跡である。アテネ五輪では、このオリンピア遺跡が砲丸投げ競技会場に決定しており、古代オリンピックの廃止から実に1600年以上が経ち、再びオリンピックの舞台として復活するのである。これを契機にオリンピアが内外で一躍注目を浴びるにちがいなく、私達も遺跡や古代オリンピックについての概要と重要性ぐらいは理解しておく必要があろう。

オリンピア遺跡と古代オリンピックについての著書や訳書は数多く出版されており、その起源、歴史、競技内容や理念等は詳述されている（スワドリング 1994；西川 1988；ヤルウリス・シミチェク 1981；メゾー 1973)。したがって、本稿では筆者がオリンピア遺跡を観て特に印象に残ったこととオリエント考古学を専門にする手前、発掘調査の背景や古代オリンピックに代表されるギリシャのスポーツと何らかの関連性のある古代メソポタミアのスポーツについて重点を置き、考古学的な視点を踏まえ論じてみたい。

１．オリンピアの立地と環境

アテネからペロポネソス半島西部にあるオリンピア遺跡までは、直線距離で200km程しかないが、路線バスはペロポネソス半島の北岸コリンティアコス湾の海岸線の道路を走るため片道約６時間を要した（図１)。オリンピアまでの道程、パトレ市を過ぎ内陸に入るとペロポネソス半島で随一の肥沃な平野が広がっており、果実、麦、野菜類が盛んに栽培されていた。この地域は古代ギリシャ時代には古代オリンピック競技を生む母胎となり、オリンピアの聖域の管理と競技を主催したエリスという都市国家（ポリス）が統治していたが

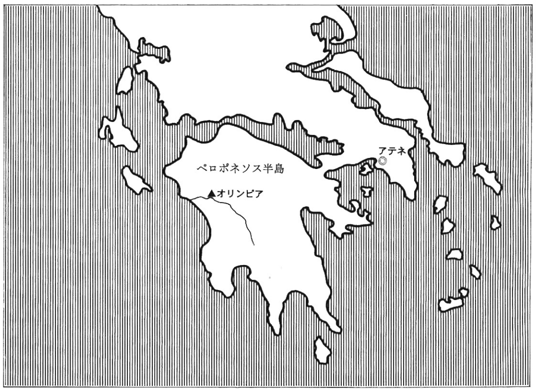

図１．オリンピア遺跡の位置

国士舘大学体育学部体育学科(Faculty of Physical Education, Kokushikan Uiversity)

写真１．オリンピアの脇を流れるグラディオス川

(Photinos 1989)、こうした広大な土壌から生み出された豊かな農業生産が、エリス誕生の基盤となったことを物語っている。もし、都市国家エリスが存在しなかったならば、オリンピック競技も生まれていなかったことであろう。

州都のピリゴス市からアルフィオス川流域を内陸に約20km遡るとオリンピア村に到着した。オリンピアはユネスコの世界遺産にも登録されているギリシャで有数の遺跡でもあり、村のメイン・ストリートにはホテル、レストラン、土産物店が軒を連ね、季節柄ヨーロッパからの観光客で賑わっていた。特筆しておきたいのは、この地域には海沿いのギリシャ地方とは一変した景観が広がっていることだ。ギリシャの遺跡が立地する地域の景観について、風光明媚なエーゲ海の島々や痩せた土地に造られたオリーブ畑、海岸地域の疎らに木々がはえた岩山などをイメージしていたが、オリンピアの地域には、ここがギリシャかと疑いたくなるような緑豊かな丘陵と谷間の風景が展開している。

オリンピア遺跡はアルフィオス川とその支流グラディオス川の合流点とクロノス山に挟まれた盆地にあり、周囲には松やユーカリ等の様々な木々がうっそうと生い茂り、あたり一面緑一色で心落ち着く静寂さが漂っていた（写真１）。それは、あたかも鶴見川上流域、多摩丘陵の一角にある小野路の里を彷彿させる風景であった。気候も海岸沿いの地域とは大きく異なり、気温は30度以上あり内陸に位置しているため湿度が高く非常に蒸し暑く、降雨量も多いという点も日本の気候に似通っている。

このオリンピアの地は、競技会が始まる以前からゼウス神崇拝の全ギリシャの聖地であったようだ（モアコット1998）。ギリシャの各地から出向くには決して地の利の良い場所とは言い難いが、こうした緑豊かな閑静な恵まれた自然環境が、オリンポス十二神の中でも最高神ゼウスを祀る最適の地として選択されたのが肯ける。

２．オリンピアの発掘調査の背景と経緯

オリンピア遺跡の発掘調査に至る背景には、実は当時の目まぐるしい国際情勢の変動と列強の政治政策が色濃く影響しており、発掘調査も国威高揚に利用されていたのであった。

18世紀に入ると、ヨーロッパの歴史家や考古学者はギリシャ神話や聖書の史実に興味を抱き、登場する都市や町の存在を実証すべくオリエント地方の遺跡の探索や調査に乗り出してゆく。オリンピアもその対象とされ、1723年にはフランスの牧師ベルナール・モンフォコンが、その後1767年にはドイツ人考古学者ヴィンケルマンが発掘調査を企画したものの、これらの調査は実現には至らなかった。最初の発掘調査は、ギリシャの独立後まもない1829年５月、フランス隊がゼウス神殿とビザンチン教会の発掘を行い、ナヴァリノの海戦後はジェネラル・メゾン隊が引き継いだ。これらの調査で発見された主な遺物は、ゼウス神殿から出土したメトープの彫像の破片で、パリに送られルーブル美術館のコレクションとして展示されている(Photinos　1989)。

学術的な発掘調査は、ドイツ考古学研究所により1875年から1881年まで実施された。この調査に至った背景には、政治的にもしのぎを削っていたイギリス、フランスへのドイツの対抗心が大きく影響している。当時はイギリス、フランスがオリエント地方の遺跡の発掘調査の覇権を握り大きな

成果をあげていたが、その後塵に拝していたドイツは国家威信をかけ、自国の学術研究等の文化面での発展と優秀性を対外的に誇示する必要性があったのである（青柳 1993）。おりしも1871年にドイツ帝国が誕生するが、そこで新星ドイツを世界にアピールするための記念的文化事業の一環として、ギリシャ史を語るうえでは不可欠で世界的に最も知られているオリンピアが調査遺跡に選定されたようだ[1]。

ドイツの威信をかけたオリンピアの調査は、考古学、建築学、地質学、文献史学、美術史等の幅広い分野の研究者で編成された調査団により行われた世界で最初の学際的発掘調査でもあった。この調査は、それまでの列強による古物美術品収集が主流の発掘調査から学術調査への転機となった画期的な調査でもあり、その科学的な発掘手法によりもたらされた成果は高く評価されている。クーベルタンは、この調査成果と刊行された発掘報告書に感銘を受けたことが要因の一つになり、近代オリンピックを復興したという（真田 2002；西川 1988）。オリンピアの発掘調査が行われていなかったならば、近代オリンピックの復興は遠のいていた可能性もあり、非常に価値ある意義深い調査であったと言えよう。

調査の結果、オリンピアの聖域の地表下約５－７ｍからはゼウス、ヘラ神殿等の主要な建築跡とともに、130点の彫像、6000点のコイン、400点の碑文、多数の土製品、1300点の金製品と15000点のブロンズ製品が出土した（Photinos 1989）。調査前に出土遺物はドイツに持ち帰らず、全てギリシャ国内に保管するという契約を両国間で結んでおり、これらの遺物の大半は聖域に隣接する博物館に収蔵されている。この契約を締結した理由には、イギリス、フランスに対して骨董美術品を収集するための調査ではない点を強力にアピールすると同時に、400年にも及ぶオスマントルコ帝国の支配からやっと独立を勝ち取ったギリシャへの温情が配慮されたのであろう。

オリンピアの調査を契機にドイツは、同盟関係にあったオスマントルコ帝国の現トルコ、シリア、イラク領内にある主要な古代の首都遺跡の発掘調査を勢力的に行い、古代オリエント史解明に多大な貢献をなし、研究面でも他の列強の追随を許さず頂点を極めてゆく[2]。しかし、上記の調査で出土した遺物の殆どを他の列強と同じように自国に持ち去り、その大半をベルリン博物館に収蔵し展示したのであった[3]。こうした列強諸国による半ば国策としての他民族が築いた貴重な文化遺産の収集は、当時の世界情勢を反映している。19世紀から20世紀初頭にかけての帝国主義時代、列強諸国は国家の繁栄を誇示するため世界各地の植民地や弱小国から古物美術品を収集したり、調査とは名ばかりの宝探し的発掘を頻繁に行い、出土品の大半を略奪し自国に持ち帰り、博物館や美術館の創設と充実に力を注いだ。その代表が現在、世界の五大博物館として君臨しているロンドンの大英博物館、パリのルーブル美術館、ベルリン博物館、ニューヨークのメトロポリタン美術館、ニューヨークのメトロポリタン美術館、サンクトペテルブルグ（レニングラード）のエルミタージュ美術館である。私達はこれらの博物館、美術館を訪問した際に、膨大なコレクションの数や展示品の素晴らしさに驚嘆し感動させられるが、それは上記したように、列強諸国による帝国主義時代の国家威信のための愚かな遺産であることを認識しておかなければならない。

こうした列強諸国は周知のように、あらゆる分野で国家の権威を示そうとしており、同時代に始まった近代オリンピックも例外ではなく、民族の身体的能力の優越性を顕示すべくスポーツを勝利至上主義に傾倒させてゆき、国威高揚の場として利用したのであった。我が国も明治維新後、西洋文明を受け入れ列強を模倣した国家体制を樹立し、帝国主義の道を歩み彼らの思想に感化され、文化、スポーツ面でも同じように追従して行くが、現在もその思想は基本的には変わっておらず、嘆かわしく思っているのは筆者だけであろうか。

3．オリンピアと古代オリンピックの歴史

まず、オリンピア遺跡の発掘調査で出土した考古遺物を通して、オリンピアの祭典が始まる以前と祭典の初期段階の様相を振り返ってみよう。

オリンピアのあるアルフィオス川流域は自然環境に恵まれており、農耕牧畜が始まる新石器時代から人々は連綿と継続し定住していたことが、発掘調査により明らかになっている。オリンピアではスタジアムや神域と新博物館の区域から出土した石器や土器片から、前4千年紀の後期先史時代（前4000－3000年）には人々が既に居住していたことが判明しており、これに続く前期・中期ヘラディック時代（前2800－1900年；1900－1600年）、ミケーネ時代（前1600－1100年）の遺物も聖域やオリンピアの周辺地域で多数発見されている（Photinos 1989）。オリンピアがオリンポスの神々を祀る宗教の聖地となったのはミケーネ時代後期からと見なされ、さらに聖域内にある同時代の土地の英雄ペロプスの墓から馬や御者等の偶像が発見されたことから、この時代には既に小規模な競技が始まっていたと推測されている（ヤルウリス・シミチェク 1981）。

オリンピック競技発生時の幾何学文時代（前9，8世紀）の聖域内から出土した遺物は、ゼウス神に奉納した数多くの土製やブロンズ製の馬や人の像、戦車と御者、大釜の三脚（聖鼎）、三脚の取っ手等である（Photinos 1989）。これらの中で最も神聖で華麗な遺物はブロンズ製の大釜の三脚破片で、表面には拳闘の場面が現された精巧な装飾が施されている（水田 1974）。こうした豪勢な遺物は、この時代にはオリンピアが既に全ギリシャのゼウス神を祀る聖地として君臨し、競技も定着していたことを暗示している。

後期幾何学文時代からアルカイック時代（前7，6世紀）にかけては、聖域を祀るため軍人や勝者から奉納された多数のブロンズ製の盾、ヘルメット、鎧、弓矢、槍等の武器が発見されている。この時代の奉納された彫像は通常ブロンズ製で、神々、英雄、勝利者、武人、走者、戦車御者、馬、グリフィン（鷲の頭・翼と獅子の胴体の怪獣）等である。これらの像の中には失蝋法で造られたものがあり、製作年代は前6世紀中頃と推測され、古代ギリシャで最初にこの技法が導入されたことを示すものだという。また、奉納品の中にはオリエントを起源とするライオン、グリフィン、セイレン（半人半鳥の精）の模様が認められるが、これらのデザインは前7世紀頃に流入したものとされている。さらにメソポタミアで興隆していたアッシリア帝国の三足容器の影響を受けたと考えられる前8世紀末の3足のブロンズ製の椅子も出土している（Photinos 1989）。こうした当時の最新の流行と技術の粋を結集した優れた美術工芸品が数多く寄進されていることからも、ギリシャ人にとってオリンピアの聖地と競技がいかに崇高で偉大であったのかが窺える。

文献や考古資料からミケーネ文明が崩壊後に北方からドーリア人が侵入し、前8世紀になり都市国家を築く過程でオリンピアの祭典が復活したといわれている（ヤルウリス・シミチェク 1981）。古代オリンピック競技は、前776年から後393年までの1168年の長期間にわたり計293回、中断なしに四年毎に継続して行われた[4]。この間にはギリシャの都市国家の黎明と繁栄と没落、そしてマケドニアやローマ帝国の支配といった民族の興亡史が凝縮されており、その過程とオリンピックの特色について簡単にまとめてみよう。

オリンピック競技は、ペロポネソス半島のエリス地方のゼウス神を祝う神聖な祭典として発生したのであるが、この地方の主導権争いをしていたエリス、ピサ、スパルタの三つの都市国家の王によって制定された休戦協定[5]と競技の理念が、ギリシャの各都市で魅了されギリシャ全土[6]に普及したようである。オリンピック競技の理想とは、名誉と崇高な競争をとおして精神の発達と強じんな身体をより優れた性質に創造するための探求であったという。さらにオリンピックは全ギリシャ

の最高神ゼウスを祝う儀式で、ギリシャ人の宗教的重要性の絆を強固にし、オリンピック精神の優れた道徳心も支持されていたのであった(Photinos 1989)。

競技者の参加資格条件はギリシャの自由市民でなければならず、彼らの中でも犯罪者や神を冒涜したり、信仰心のない者、競技や休戦の規則を破ったことがある者の参加は認められなかった。女性と自由市民の約3倍もいた奴隷の参加や観戦は禁止されており、古代ギリシャ社会の強固な男尊女卑性と身分制度を反映している。参加者は競技の始まる10ヶ月前からは出身地の都市で、そして1ヶ月前にはオリンピアかエリスで訓練が義務づけられ、競技開催日にはこの旨をゼウス神に宣誓しなければならなかった(Photinos 1989)。

競技は7月か8月に開催され、最終的には計5日間の日程で行われた。プログラムに含まれる競技は身体競技競争と騎馬(乗馬)競争に大別され、身体競技者は年齢によって成人と少年に、騎馬競技は戦車競争と競馬に区分されていた。最も古い競技はスタジアムの長さである192.25mを走った徒競走(ステイド・レースStade race)で、前728年まではこの競技だけが行われた。その後、競技大会が全ギリシャ、全ローマに拡大するにつれ、往復距離走(ディアウロスDiaulos/two-Stade-race(192.25m×2)、長距離走(ドリコスDolichos/24 Stades(192.25m×24))、五種競技(ペンタスロンPentathlon(幅跳、円盤投げ、槍投げ、距離走(Stade-race)、レスリング)、レスリング、ボクシング、パンクラティオンPankration(レスリングとボクシングを組み合わせた格闘技)、重装歩兵競走(全身に鎧をつけた徒競走)、競馬、戦車競走等の種々の競技と伝達者やトランペット奏者競技等が順次採用されていった(Photinos 1989)。

賞品についてだが、初期のオリンピック競技の勝者への賞品は、リンゴ1個もしくはブロンズ製の三脚1個であったが、前752年から野生のオリーブの枝を編んで造った王冠が授与されるようになったという。王冠はギリシャ青年の最も崇拝し熱望するもので、競技は金銭目的ではなく精神的な改善、心身の発展と調和、美と崇高さを極めることが目的であったことを現している。競技は厳しい強制的な規則によって維持され、エリス人で構成された審判員により管理運営され、競技者が規則を破った場合は、違反の重さに従い資格剥奪、公衆面前での鞭打ち、罰金等の処罰が科されたという(Photinos 1989)。

前5世紀末以降になると、オリンピック競技の基本精神や神聖さがしだいに薄れてゆき、常に大物政治家、有名将軍、前チャンピオン、芸術家、哲学者、雄弁家、知識人が観戦や様々な儀式のために招待され、彼らの思想や主義主張、芸術を全土から集まったギリシャ人にアピールするための汎ギリシャ的な情報の提供や交換の場にも利用されたという(Photinos 1989)。

前338年にマケドニア人によるギリシャの支配が始まり、ヘレニズム時代が到来する。アレクサンドロス大王の死後、彼の後継者達は新しい記念碑的建物や催し物を立ち上げたり、金銭によって聖域や競技を運営するようになり、オリンピック競技の宗教性や神聖さは失われ見せ物的要素が強くなり、競技の理念はしだいに崩れていった。前146年にギリシャはローマ帝国に征服され、以後オリンピック競技と聖域はローマにより長期にわたり支配されたのであった。この時代には多くの職業競技者が金銭や利権目的で、皇帝や役人が自国の繁栄や権威を示すためオリンピック競技に参加するようになった。そして3世紀以降はギリシャの諸都市ではオリンピアの求心力は年とともに衰退し、オリンピック競技の威信は薄れていったという。一方、このころからエジプト、フェニキア、アルメニア等のローマ帝国の全ての属国、属州から競技者がオリンピックの勝利を目指しオリンピアに集結したため、オリンピック競技は実質的に多民族、多人種からなる国際的特質を備えた大会になったようだ。

しかし、第262回オリンピック大会(269年)か

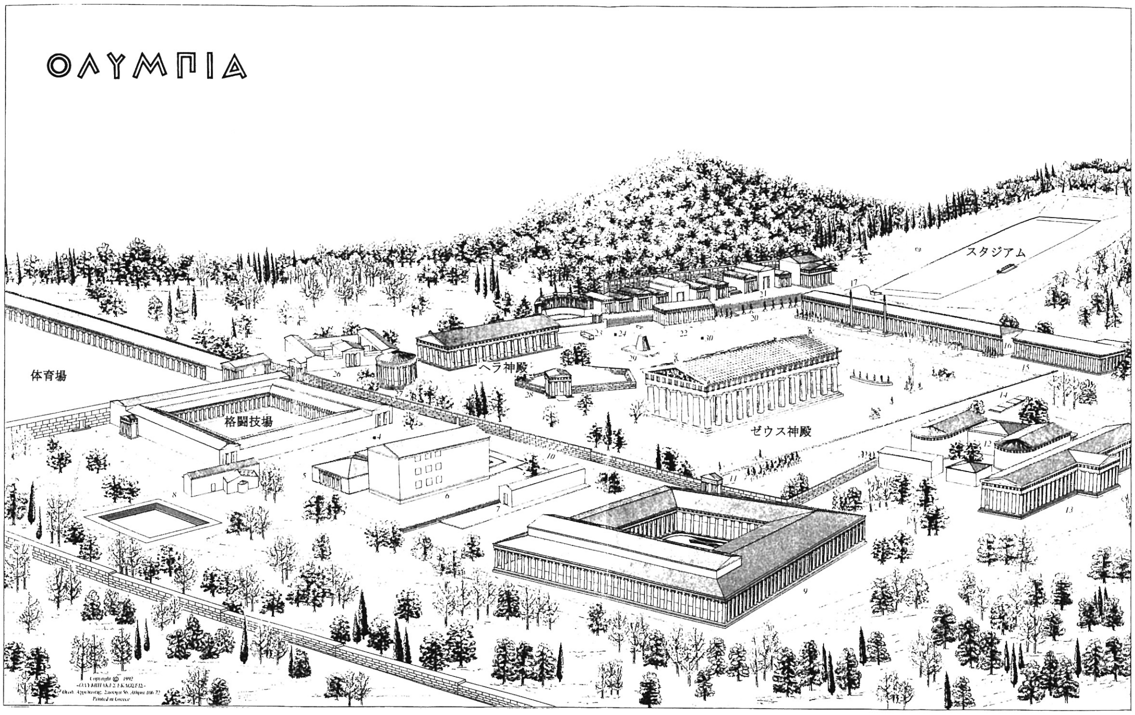

図2．オリンピア遺跡の復元図（Photinos 1989）

らは、オリンピック勝者の登録は中断し、それ以後、競技についてやオリンピック勝者の名にふれた情報は、373年と385年の競技を除き記録に残っておらず、オリンピックが終焉に近づいていたことを示唆している。393年に最後のオリンピック競技が行われたが、翌年、ローマ帝国がキリスト教を国教に定めたことを契機に、多神教の神を祝うオリンピックは異端視されテオドシウス王によって廃止された。その後オリンピアの聖域の荒廃は進み、狂信的なキリスト教徒の破壊行為や6世紀の二度の大地震で完全に建物は崩壊し徐々に埋没してゆき、18世紀になるまでギリシャ・ローマ古代史に冠たる名を馳せたオリンピアは忘れ去られたのであった（Photinos 1989）。

4．オリンピア遺跡の現状

オリンピアは古代ギリシャで最も重要なゼウス神の聖域で、同時に最も崇高な競技が行われた全ギリシャの中心地であった。故に、建物は礼拝や競技のため各時代幾度となく増改築が繰り返されたようだ。遺跡の入場口から聖域に入ってすぐに、４－５ｍほど下に降ってゆくが、これはドイツ隊が発掘調査時に掘り下げた深さで、各建物遺構はこのレベルから出土したのである。出土した建物の残骸の広がりは、6世紀に完全に地震により崩壊した時の状況を呈していたようだ。聖域は礼拝施設のある神域と競技場や諸施設のある区域に分かれる。神域内にはゼウス神殿、ヘラ神殿、レア神殿、ペロピオン、フィリッペイヨンや多数の祭壇と数千の像があった。神域の西側には体育場、格闘技場、競技者、司祭、公務の招待者用の建物群が、東側にはスタジアムがある。北側のクロノス山の麓にはギリシャの各都市からの奉納品を納めた宝物庫があり、南側には南門の回廊跡や会議場がある（図2）。これらの建物のほとんどはオ

リンピアの対岸（アルフィオス川の左岸）の山から産出する貝殻入り石灰岩で建設されている(Photinos 1989)。では、特に印象に残った体育場、格闘技場、スタジアム、ゼウス神殿、ヘラ神殿について簡単に触れてみよう。

遺跡に入り階段の小道を下ると右手に体育場がある。体育場は大きな中庭を持った建物で、建設当初は四辺が回廊によって囲まれていたが、西側はグラディオス川の浸食を受け遺構は全く遺っておらず、前2世紀に造られた東側と南側の回廊遺構の一部がのこっている。約80m四方の広場とその周りの回廊に復元された石柱列が立っているだけで、遺跡マップを片手にしていないとこれが建物跡であったのか判別するのは難しい（写真2）。中庭の広場は徒競走と五種競技に参加する競技者のランニング、槍投げ、円盤投げ、幅跳びの練習場として使用され、雨天や酷暑の天候状態が悪い時には四辺の屋根付き回廊部で練習が行われたという（Photinos 1989)。体育場の殆どは未発掘で、東辺部の回廊は当時は全長210.5mあったと推測されているが、実際は長さ約80mの範囲しか発掘していない。

格闘技場は体育場の南に隣接しており、回廊部の柱列が部分的に修復されている（写真3）。前3世紀に造られた一辺約66mの正方形の建物で、入り口は北西コーナーにある。建物の内側は中庭になっており、レスリング、ボクシング、パンクラティオン競技者達の試合場兼練習場として使用された（Photinos 1989)。体育場と同様に中庭はドリス式柱の回廊で囲まれており、天候の悪い日には練習はこの回廊部で行われた。回廊の背後には、競技者の体に塗ったオリーブ・オイルを落とす部屋、砂を落とす部屋、トレーナーから指導を受ける部屋等の様々な部屋が造られていたようだが、その痕跡を確認することはできなかった。

アーチ型の天井部を持った石造りのスタジアムの公式入場口を通過すると、眼前には長方形の細長いトラックと、それを取り囲む土手の観客席からなるスタジアムが広がる（写真4）。体育場や格闘技場等は上記したように、建物跡が殆どのっこていなく当時の様子を偲ぶことはできず、さほど感動はしなかったが、このスタジアムがオリンピアの中で唯一当時の原型を留めており、古代オリンピックの時代を懐古することができた。今で

写真2．体育場跡

写真3．格闘技場の回廊跡の石柱

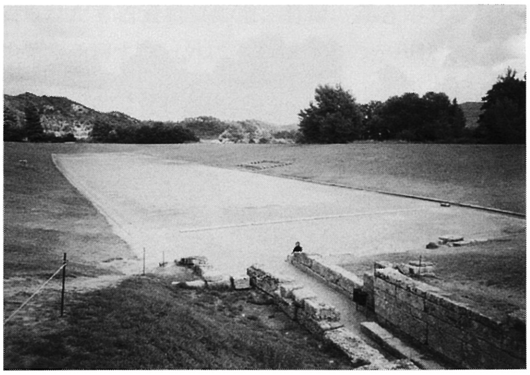

写真4．スタジアム

写真５．スタジアムのスタート・ライン

写真６．ヘラ神殿跡

写真７．ゼウス神殿の倒壊した石柱

こそ静寂さが漂っているが、競技時には立錐の余地もなく４万人近くを収容したスタジアムの観客が歓喜し、歓声がオリンピアの森に響き渡たる光景が、瞼に浮かぶようで強者どもが夢のあとといった、まるで古戦場にきたかの感慨に浸ることができた。さらにギリシャの遺跡のスタジアムの観客席は大半が石造りであるが、このスタジアムは土手になっているので、古代の臨場感を一段と深く醸し出している。かつてスタジアムは神域内にあったが前４世紀に現位置に移築され、ローマ時代にかけて頻繁に改築されたようだ。ドイツ考古学研究所は1958－61年にかけて、このスタジアム全域の発掘調査を行い、古代のトラックと観客席を検出した。トラックは全長約212.5ｍ、幅約33ｍを測るというが、見た目はそれより小さい印象を受けた。このトラックで徒競走、槍投げ、円盤投げ等の競技が行われたのだが、東側と西側にはスタートライン及びゴールラインとなる幅約40㎝の細長い石板が真っ直ぐに敷かれており、この間の直線距離が192.25ｍである。石板は20に分割されており、同時に20人がスタートすることができたと推測され、表面にはスタート時に足を置いたと考えられる二本の平行する溝が刻まれている（写真５）。トラックの周りには石で造られた排水溝と水道溝が廻らされており、大会は夏期に行われたため観客は暑い時にはここを流れる水を飲んだという。因みに、オリンピック競技の初期の頃には観客が水不足で苦しみ、熱射により多くの犠牲者がでたという（Photinos 1989）。スタジアムのスタートライン近くの南側の土手には審判員や役員の席があった石の基壇があり、この基壇の向かい側の北の土手からはデミテル・カミニネという女司祭の石の祭壇が発見され、彼女がこの祭壇の上か隣に座ったと考えられている。ギリシャの全女性の中でオリンピック競技の観戦が許可されていたのは彼女唯一人であったという（Photinos 1989）。なお、このスタジアムが2004アテネ五輪の男女砲丸投げ競技の会場に決定しており、このスタジアムでは初の一般女性の競技観戦が可能になるのだ。

ゼウスの妻ヘラ神を祀ったヘラ神殿はギリシャで最も古い神殿の一つで、前600年頃に創建されたという。この神殿は近代オリンピックの聖火の採火式の舞台としてオリンピアの建物跡の中でも最も知られているであろう。各大会前にペロプス

を着た女神官により執り行われる採火式の映像の中で、何回も目にしたことがある修復復元された4本のドリス式石柱が特に印象的であった（写真6）。神殿の大きさは長さ50m、幅18.75m、高さ約7.8mであったと推測されている。ドリス式の柱が6本づつ両端にあり、両側面には16本づつの柱列がある。元来、柱は木で造られていたが、時代が下るにつれ石灰岩の柱に徐々に取り替えられたという（松島 1974）。

ゼウス神殿は神域では最も壮麗な建物であったようだが、現在では立っている柱は一本もなく、太さ約2mの巨大な石柱の残骸が地面に散らばっているだけで当時の面影はない。特に神殿の南側には522年と551年の大地震により将棋倒し状に倒壊した柱を見ることができる（写真7）。この神殿は調和と均整のモデルとなった芸術的建物で、エリス人の建築家リボンによって前470－456年の間に建設された。神殿はドリス式建物（6×13柱列）で、その規模は64.12×27.66m、高さ20.25mを測りギリシャ最大であったという。神殿の内部には世界七不思議の一つでもあるフェデアスの造った金と象牙の巨大ゼウス像が安置され、神殿の東端部の入り口ではオリンピック勝者の王冠授与式が競技の最終日に執り行われたという（Photinos 1989）。神殿のまわりには各都市や個人が奉納した神々、英雄やオリンピック勝者の像の台座が散在している。これらの中で注目すべきは高さ約3mの勝利の女神ニケの像の台座で、神殿の南東コーナー付近に修復されている。

5．古代オリエントのスポーツの起源

筆者は古代スポーツ史に関しては全くの門外漢であるが、メソポタミア古代史を専門に研究しており、イラク、シリアで5年ほど発掘調査に携わっていた経験から、考古学的視点を踏まえ古代スポーツの起源についての私見を述べてみたい。

古代スポーツの起源を探る場合には、常にエジプト、ギリシャのスポーツが取り沙汰され脚光を浴びているが、筆者はその起源は古代オリンピック競技の開始から遡ることおよそ2千年、世界最古の文明が発祥したメソポタミア[7]の地にあると考えている。

古代のメソポタミアは農業の開始、金属器や文字の使用、都市国家や帝国の誕生など現代の文明社会の基盤となる殆どの物質や出来事が世界で最初に勃興しており、人類の進歩の歴史が凝縮されている。中でも最も注目すべきは、前4000年頃、南メソポタミア地方[8]にはシュメール人が定住し、大規模な灌漑農耕を行い麦等の穀物生産は飛躍的に向上し、それまでの町邑は豊になり人口が増加・集中し都市規模に巨大化し、やがて前3000年頃には各都市が独立した国家を築くことだ。それがシュメールの都市国家と呼ばれている共同体で、その数は20ほどあり著名な都市国家[9]としてウル、ウルク、エリドウ、ラガッシュ、ニップールがあげられる。これらの世界最古のシュメールの都市国家の支配体制、政治経済や社会構造の実体は、楔形文字で記された数万点の粘土板文書や碑文が発掘されており大まかな様相は明らかになっている。しかし、スポーツに関しての記録は非常に乏しく、限られた考古資料（彫像、肖像、浮き彫り等）に基づき考察する以外に手段がないのが現状である。そのためか古代メソポタミアのスポーツを論じた文献には、王が興じた狩猟や弓、槍、戦車, 騎馬等の戦争での軍備を起源としたスポーツの発生については比較的詳しく言及されているが、出土資料の少ないレスリング、ボクシングについてはあまり触れられていない（オリボバ 1986； 松浪 1994）。そこで、古代メソポタミアのスポーツの原点ともいえるレスリング、ボクシングの発生について焦点をおき検討してみよう。

古代メソポタミアのレスリング、ボクシング等の格闘技は、他の地域と同様に宗教儀礼から発生したという説が有力となっている（オリボバ 1986）。したがって、シュメールの都市国家の宗教観とその重要性を理解しておく必要があり、まずその特色を概観しておこう。南メソポタミアは

4月から9月にかけては全く降雨はなく、夏は炎天が続き気温は50度以上に達する、一方、冬は氷点下近くにもなる過酷な自然環境である。こうした中で都市国家は農業を経済基盤としており、支配者や人民にとっては農作物の豊穣を左右する日々の天候が最も重要であった。当然ながら当時は天変地異等の自然現象は全て神の力で生じるものと信じられ、日常生活においても隅々まで神々の力が影響しているとされ、多数の神々が祀られた宗教色の濃い社会が形成されていた。各都市にはそれぞれの守護神が祀られた神殿があり、神は人民には絶対的存在で土地や交易も神の名のもとに支配されていた。専制君主の王は神の預言者として振る舞い、神格化された現人神として人民を掌握し、最高神官として神官達とともに国家の安寧と繁栄を願い、神前で占いや祈祷等のあらゆる儀式を執り仕切った。神殿では戦勝祝賀、出陣式、豊穣祝い、新年・新月祭、王位継承祝い等の様々な儀式が行われ、神殿内や中庭にある祭壇や供物台には農作物、家畜、食料加工品、酒類が供えられ、豪華で精巧な造りの容器、装飾品、彫像、武器、日常生活具等の品々が奉納されたのであった（前川 1989)。

こうした神事の儀式や祭りを執り行う際に、音楽、歌、舞踊、ボクシング、レスリングが儀礼として演じられたようだ。その証拠を示す考古遺物が各地の都市国家遺跡の神殿内から出土した数多くの奉納装飾板[10]で、刻まれた図柄には女神や神官のいる宗教的儀式の場面、ハープ奏者や歌手を描写した招宴や戦勝の祝宴の場面、そしてレスリング、ボクシングの情景を描写したものがある。これらの中でバグダッドの北約20kmにあるカファジェ遺跡のニントウ神殿から出土したレスリングとボクシングの場面が刻まれた奉納板の破片と褌を掴みあいレスリングを行うブロンズ製の小像は(Delougaz 1942；Lloyd 1978)、スポーツの起源を語るうえで格好の遺物として絶えず引用されているが（オリボバ 1986； 松浪 1994)、これらに関しての詳しい考察はあまりされていない[11]。筆者はこれらの遺物をイラク国立博物館で幾度となく実見したが、同遺跡から出土した未公表の奉納板の破片は他に5点ほどあり、それらにも何種類かの寝技、立ち技が認められた（Basmachi 1976)。さて、奉納板の機能であるが神殿内から出土している事実を素直に踏まえれば、目的達成祈願や祈願成就のお礼として神に捧げられた神聖な品物と見なすことができ、神前奉納相撲のごとくレスリング、ボクシングも神前での広場で行われた神聖な宗教的儀式であったとする見解は間違いないであろう[12]。さらに、このことは文献的証拠からも裏付けられている。実例を挙げると都市国家ニップールから出土した前2000年紀初頭の“マルトウの結婚”という神話的物語が記された粘土板文書には、都市の諸祭典時には開催を知らせるブロンズ製のドラムが鳴り響き、神殿に祀られている都市神のために、周辺地域から多数の強者やベルトを締めたチャンピオンが都市の中庭に集まり、レスリングを競い合ったことが記述されている（Black et al. 1998)[13]。また、確証はないがシュメールの最も重要な儀式に、男女の神の婚姻により大地の豊穣がもたらされるという聖婚儀礼があり、レスリングはこの儀式を再現する際の男性の神役を選ぶために執り行われたもので、試合の勝者が神役に抜擢されたという説がある(川又 1988)。

では、なぜ格闘技が神聖な儀式的要素を持つようになったのか若干の推論を展開してみよう。シュメールの都市国家間では、農地や水利権をめぐり絶えず戦争が繰り返えされており、各都市では強力な軍隊は不可欠であったことであろう。王達は国家の繁栄と権力を誇示するため、荘厳な宮殿、神殿、記念碑的な建物や優れた美術工芸品を造り都市国家間で競い合っていたが、当然強力な兵隊や身体屈強な民衆の存在も国家の威信になったはずである。そこで、兵力増強の手段として戦闘での差しの殺し合いには最も有効なレスリング、ボクシングが導入され訓練が行われたのだ。狩猟採集の先史時代から狩猟技術や体力に秀でた男は、

共同体の中では常に尊敬されリーダー的存在であったと推測されるが、むろん都市国家成立後の農耕民族シュメール人にも、男の美徳は身体的強さだという人類の普遍的な価値観は、浸透していたはずだ[14]。当然ながら国の存亡が懸かった戦争で、功績があった身体屈強で武勇に優れた兵士も英雄として崇められ、しだいに支配者層の中では強さを象徴する格闘技の重要性が一層高まり、神事の中に受容され定着していったのであろう。

格闘技は神聖な宗教儀式であるとともに大衆娯楽的性格も既に備えていたようだ。都市国家では支配階級の成立に伴い職業が専門分化され、現在と同じような様々の分野の専門職人が出現するわけだが[15]、上記の"マルトウの結婚"によれば、レスリング大会の勝者には都市の神から賞金として銀、貴石、宝石類が贈られたということや、マルトウの対戦相手に手強い格闘家を選りすぐって連れてきたという記述があり、すでに賞金稼ぎの格闘家の存在や格闘技が見せ物としてシュメール人の日常生活に定着していたことを示唆している(Black et al. 1998)。おそらくレスリング、ボクシングの専門格闘技集団や武闘家も存在し、都市の広場では民衆を前に娯楽的、見せ物的な興行試合が開催されていたのであろう[16]。こうした格闘技の試合形態を知る手掛かりとなる興味深い記述が"マルトウの結婚"に認められる。それによるとマルトウは対戦相手を一人づつ壊滅的に打ちのめし傷だらけにし、これ見よがしに死体を担ぎ上げたということから(Black et al. 1998)、レスリングというよりも殴る蹴る等何でもありの、パンクラティオン形式の殺し合いの試合が行われていたと想像される。当時は既に戦争捕虜、購買、借金よる奴隷民の存在が出土した文献や考古資料から明らかになっており[17]、想像を逞しくすれば、格闘技集団は彼らの中から身体屈強なものを選りすぐり構成された可能性もありえる。さらに平和時には都市国家間では古代オリンピックと同様に、国家の威信をかけたレスリング、ボクシング、そして槍、弓、剣、騎馬、戦車等の武器を使用した競技が、次章で詳記するように汎シュメール的祭典として、あたかも都市対抗戦のごとく行われていた可能性が強い。このことを傍証する好例として、前2600年頃に成立した人類史上最古の物語"ギルガメッシュ叙述詩"の中に、都市国家ウルクで行われたポロに似た競技の試合の記述が認められる。この競技は馬に乗るのではなく、騎馬戦のように一人が複数の人の肩にまたがり行うポロで、ウルクの王ギルガメッシュは臣下の若者達にこの試合を延々と行わせ、疲弊させることで彼らを抑圧したという(Nemet-Nejat 1998)。この記述を鵜呑みにすれば、この集団競技は支配者が権威を誇示し、人民を制圧する手段や彼らの娯楽のために行われたと解釈することもできるが、じつは当時の政治情勢を反映した都市国家間で行われた試合で、都市対抗戦の性格が色濃く読み取れるという見解もある[18]。

文献、考古資料が乏しく断言はできないが、結論としてメソポタミアでのスポーツは、シュメール人による都市が誕生し支配体制が確立する前3500－3200年頃(ウルク後期時代)には既に始まっていたと推定することができよう。古代メソポタミアのスポーツの発生について強調しておきたいのは、シュメールの都市国家の支配者層にはスポーツを特に戦勝の祝賀、出陣の儀式に組入れ軍事力の誇示と戦意高揚を煽り、都市国家民のナショナリズムの高揚や挙国一致の場として利用するという近現代と全く変わらない独裁思想が介在したと考えられ、こうした専制観念が古代メソポタミアのスポーツを生み出す背景となったのは疑いないということである。

将来、イラク南部の都市国家遺跡の発掘調査が再開され粘土板文書が出土すれば、その中には対戦表、星取り表、ルール、勝者名等のスポーツに関連した史料が必ず発見されると確信している[19]。

6．古代ギリシャと古代メソポタミアのスポーツ

古代オリンピックと古代メソポタミアのスポーツを関連づけるには、無理があると思うかもしれないが、実は多くの共通性が潜在している。まず、古代ギリシャと古代メソポタミアの社会を対比し、両者の特質を探ってみると都市国家、多神教、守護神（都市神)、同一民族、戦争という共通のキイワードが浮かび上がる。これらの共通項目を踏まえ両文化のスポーツの共通性と差異、交流と系譜について簡単に触れてみたい。

古代ギリシャの都市国家は神話の神々を信仰の対象とした多神教で、主にオリンポスの神々を守護神とし、中でもゼウス神、アポロン神が絶大な尊厳のある神々であった。シュメールも同じように多神教でおよそ1500もの神々がおり、中でもアン（天)、エンリル（中空)、エンキ（地）の三つ神々が最も崇高で、全都市国家の共通の崇拝の対象になっていたのだ（月本 2001； 岡田・小林 2000)。前3000年頃には既にシュメールの都市国家は、宗教的に統合していたことが実証されており[20]、これらの三つの神々を守護神として祀ったニップール、ウルク、エリドウの都市国家では神々を祝う際には、天照大御神を祭神とする伊勢神宮の大祭のごとく、全都市国家から多くのシュメール人の参拝者が集まり、盛大な汎シュメール的祭典が開催されたにちがいない。古代ギリシャでは前８世紀になり都市国家が誕生し、全ギリシャ人にとって最も崇高な神であるゼウス、アポロンを祝うオリンピア祭、ピュティア祭、ネメア祭等の汎ギリシャのスポーツ祭典が行われていたことを考慮すれば（ヤルウリス・シミチェク 1981)、シュメールでも上記した主要神の祭典の場では、神を祝う儀式とともに各都市国家の繁栄を示すべく様々な行事が執り行われたに違いなく、その一環としてスポーツ競技も組み込まれていたと考えられまいか。当然、各都市では祀る守護神に合わせて儀式も異なっていたはずで、神事としてスポーツ競技が行われていたならば、その種類も異なっていた可能性もある。さらにシュメールの都市国家は覇権争いの中で、同一民族が共有する本能からか異民族の脅威や神を祝う祭典時には結束し、古代ギリシャのデロス同盟とおなじく都市同盟を結んでいたことが例証されており[21]、古代オリンピックと同様に祭典時には休戦協定が国家間で締結されていたことを示唆している。こうしてみると推論の域をでないが、前3000年紀におけるシュメールの都市国家間では、上記の汎ギリシャの諸祭典とおなじく汎シュメールの祭典が開催された可能性が非常に強く、それが前2000年紀に入ると南メソポタミアには異民族が侵入し、シュメール人の純粋な都市国家は壊滅し多民族からなる国家が群雄割拠したため、汎シュメール的祭典は徐々に廃退していったと考えられる。

次に古代のメソポタミアとギリシャのスポーツの交流についてであるが、両地域の交易は東地中海沿岸の海上貿易民族のフェニキア人を介して前1700年頃から盛んに行われたことが、東地中海沿岸やギリシャの島々で発見された沈没船や出土した土器、壁画、金属器等の考古学的証拠により明らかになっている（周藤 2002)。物品の交易とともに文化交流も活発に行われたようで、ミケーネ時代後期になって粘土板文書（線文字Ｂ）の記述にギリシャ神話やオリンポスの神々が登場するが、それらの内容が前1500年頃の北メソポタミア地方のフルリ人の神話に酷似していることから、小アジアもしくは地中海を経由しギリシャ本土に伝播したと考えられている（小川 2001)。さらに、時代が下るとギリシャ語の起源となったフェニキア文字も東地中海沿岸部から流入したのである。こうした証拠と交易を通じて異文化の交流が生まれ、各民族が培った固有の政治体制、思想、宗教、芸術、スポーツ、生活習慣が波及してゆくことを考慮すれば、あらゆる文化が当時の先進地であったメソポタミアからギリシャへ流入したと見なすこともできる。スポーツもその例外ではなく古代ギリシャのスポーツの源流は、エジプトのみならず

最古の文明が起こったメソポタミアにあったと推測することも可能であろう[22]。

おわりに

古代から人類は豊かさと便利さを追い求めて文明社会を創り上げたが、人類の理想はオリンピックの理念でもある平和、自由、平等で、全人類にそれらが浸透することを願って生きている。国家や独裁者の威信をかけた戦争や巨大建造物の建設、スポーツ競技の開催といった事象は、時代地域を問わず普遍的であり、人類は常に基本的に同じことを繰り返している。要するに人類である限り古今東西、人間の心理は同一性を保持し、古代人も現代人も思想思考の原点は不変であることを明示している。古代オリンピックは神を祝う神聖な祭典として発生するが、しだいに見せ物的祭典になり、多民族の国際的祭典に発展し、そして衰退してゆき消滅の歴史を歩む。近代オリンピックもクーベルタンが掲げた理想が歪曲され国益や商業目的に利用されており、将来、同じ道を辿る可能性もある。つまり人類が築いた文明や帝国、大きな事象は常に黎明期－発展期－隆盛期－衰退期－終焉の盛衰興亡の周期を辿っているのだ。所謂この歴史循環説は古来から多くの歴史家や思想家が提唱し、人類の未来に警鐘を鳴らしてきたが、栄枯盛衰の変遷パターンを変えることは現生人類では不可能であった。それは約4万年前に現代人の先祖である新人ホモ・サピエンスが出現するが、現代人まで脳の思考力を司る前頭葉の発達は全くないということが証明している。さらに人類の生命は長くともせいぜい80年か90年で、頭では過去の歴史をいくら理解しようが、実際に何百年といったスパンでの様々な歴史的事象を実体験することができない。故に、いくら物質的に新しいものを創造し文明が進歩しようが、精神的な発達はあまりなく未熟で停滞しており、同じ過失を絶えず繰り返しているのだ。人類はこの一万年で物質文明を飛躍的に進歩させたが、権力、名声、富などへの欲望心を根本的に全く持たない心理思考的に研ぎ澄まされ改善された人類の出現には、数万年以上を要するであろう。我々現代人がこうした人類の本質的思想を少しでも打破し、精神的に進化するためにも、各人が先人達が遺した過去の歴史をふり返り見極め、彼らと同じ轍を絶対に踏まないような将来への展望を見出すよう努力しなければならない。

注

1）この背景には当時のギリシャ国王が列強諸国により、送り込まれた親ドイツ派のデンマーク王子ゲルギオスＩ世であったことも大きく作用したのであろう（真田 2002)。なお、トロイ、ミケーネを調査した「古代への情熱」の著者として知られているドイツ人考古学者シュリーマンも当初はオリンピアの調査を希望していたようだが、国家組織の調査には太刀打ちできず、結局は同じペロポネソス半島にあるミケーネ遺跡の発掘を選択したのであった（周藤 1997)。

2）トルコではギリシャの都市国家であったペルガモン遺跡やヒッタイト帝国の首都ボガズキョイ遺跡、イラクではアッシリア帝国の首都アッシュール遺跡や新バビロニア帝国の首都バビロン遺跡の発掘調査を行った。

3）ペルガモン遺跡のゼウス大祭壇とバビロン遺跡のイシュタール門は、全て移送され修復展示されており、ベルリン美術館の顔として最大の見せ物になっている。

4）オリンピック競技の開始年が古代ギリシャ史の編年の起点となる記念すべき年であり、ギリシャ人にとって如何に重要な祭典であったのか示唆し、第一回オリンピック大会の前776年がギリシャの歴史時代の幕開けに相当するのである。さらにオリンピック大会は四年間隔で行われているため、歴史的に主要な出来事を年代付けする際の指標としても利用された。例えば、ペルシャ戦争のテルモピレーの戦いは第75回オリンピック大会の年（オリンピアード）に行われたと記録されており、つまり前480年だということがわかる（Photinos 1989)。

5）休戦協定とはオリンピック競技が開催される月は戦争と敵対行為は1ヶ月間中止し、さらにオリンピアとエリス地方は極めて神聖で侵すことができない旨を宣言し、兵隊や武装者の立ち入りを禁止した。そして後には休戦期間は3ヶ月間になり、

全ギリシャの平和を回復する効力を保持していた。こうしてギリシャ津々浦々の都市からの代表や競技者達、そして多数の巡礼者や観戦者のオリンピアまでの行程の安全は保証された。さらに、都市や個人の間でどちらかが休戦協定を破った場合は、オリンピック審議会で処罰され厳しい懲罰と重い罰金が科せられた（Photinos 1989）。

6）小アジアのミノアのイオニアの都市、キプロス、ギリシャの島々、ポントスの植民地（トルコ黒海沿岸）、北アフリカ、マグナ・グラエキア（イタリア南部の植民都市）。

7）ギリシャ語で二つの川の間という意味。チグリス、ユーフラテス川流域の肥沃な沖積平野で、現在のほぼイラクに相当する。

8）バグダッドより以南の地域で、自衛隊が派遣されているサマワ市のある一帯の地域といえば分かり易いだろう。

9）各都市は城壁により防御され、中心部には神殿や宮殿等の公共的建物があり、その周りには民衆が住む市街地が広がっていた。さらに都市はその近隣の土地や点在する村や小規模の町を支配しており、都市国家は中核の都市部と近郊の諸町邑の領域から成り立っていた。都市国家の規模は大小様々で人口は定かではないが、数千人から数万人であったと推測されている。こうした都市国家の様相は前８世紀になって誕生するギリシャの都市国家（ポリス）とおよそ同じである。各都市国家は専制君主の王により支配され政治、宗教、階級制度は成立しており、王を頂点とした支配制度が既に確立されていたのだ。具体的に言えば最高神官、軍人を兼備した王の下に、神官、官僚、軍人、職人・農民が続き末端に奴隷が位置するヒィエラルキーである。都市国家は豊富な穀物生産と家畜等を経済基盤としており、農産物の余剰を糧に遠隔地域と交易を行い、当地では産出しない鉱物、宝石、木材等の天然資源を入手した。こうした原材料を加工し輸出することで支配者層には莫大な富みが蓄積し壮大な宮殿や神殿が造られ、都市国家は前2350年にアッカド帝国に征服されるまで繁栄の一途を辿ったのであった。

10）この遺物は浮き彫りが施された石灰岩製の30－40㎝の方形の装飾板で、中心部に釘を打ち込む孔があり、神殿の壁に固定し飾られていた。奉納装飾板には陶製のものもある。

11）ブロンズ製のレスリングの像は、頭上に壺をのせ戦っているためか曲芸師の像と解釈されている（オリボバ 1986）。

12）カファジェ遺跡の神殿のある広場には無数の大人、子供、犬の足跡が検出されており、公共の広場の機能を持ち民衆が絶えず参拝に詣でたことを示し、神殿の尊大さを現している（Delougaz 1942）。

13）“マルトウの結婚”と題された物語のあらすじであるが、狩猟民の独身男マルトウが結婚相手を捜しにイナブという都市に嫁探しに出向き、祭典時のレスリング大会に参加し優勝し、神が様々の高価な賞品を贈ろうとしたが、彼は全てを拒否し神の娘との結婚を申し出て、神が許し結婚するというストーリーである（Black et al. 1998）。

14）“マルトウの結婚”からは、当時の人々の男性観も民族、職業には関係なく屈強で勇敢、そして純粋で一途な心の持ち主が理想であったことを読み取ることができる。

15）例えば貿易商人、各商店主、大工、宮大工、船大工、金銀細工人、貴石細工人、鍛冶師、陶工、織物職人、指物師、皮革製造人、漂白職人、漁師（川、海、湖）、家畜飼育人、各種の食品製造者、居酒屋店主等の様々の職種の記録が認められる（吉川 1990）。

16）ウル第三王朝期（前2100年頃）の文書には道化師が熊、猿を訓練し曲芸させ見せ物にした記録が残っている（前田 2003a）。

17）ウルク遺跡から出土した前3200年頃の円筒印章の図柄には、支配者の前で跪き両手を合わせて懇願する人物や、全裸で後ろ手に縛られ鞭打たれる人物が刻まれている（Roaf 1990）。

18）シュメール史学の権威、京都大学の前川和也教授の教示による。

19）イラクの遺跡の発掘調査はスポーツの起源を探るだけではなく、世界人類の歴史を解明するうえでも非常に重要な役割を担っている。現在、イラクではテロが横行し治安状態が極めて悪いが、復興が進み一日でも早く平和が訪れる日を願っている。

20）文献史料から前3000年頃の都市国家ウルクの戦いの神を祀ったイナンナ神殿の祭儀費用を、輪番制で各地の諸都市国家が共同で負担したことが明らかになっており、祭典を開催するための都市連合が結成されていたことを示している（Mathews 1993； Steinkeller 2000）。

21）前2500年頃の史料にはウルク、アダブ、ニップール、ラガッシュ、シュルパック、ウンマの六つの都市国家から合計670人の兵士がケンギルという場所に召集された記録が認められ、北方の強大都市国家キッシュに対抗するための都市同盟と理解されている（中原 1964；前田 2003b）。こうした場では当然、合同軍事演習が行われたと考えられ、その中に兵士の鍛錬としてレスリング、ボクシン

グの格闘技が採用されていたと推測される。

22) ミノア、ミケーネ時代にはエジプトとは密接な文化交流を保っており、スポーツもエジプトの強い影響を受けたと考えられている（オリボバ 1986)。因みに古代ギリシャのスポーツを代表するクレタ島のクノッソス宮殿の少年ボクシングの壁画は、メソポタミアとの交易が始まった時代の遺物である。古代ギリシャのミケーネ時代のスポーツ起源は、石棺や副葬品の容器にボクシング、戦車競走、牛飛び、そして喪に服した婦人像が描かれていることから、戦死者を弔う葬送儀礼も一つ要因であったと考えられている（ヤルウリス・シミチェク 1981)。しかし、メソポタミアではそうした遺物が埋葬施設から出土した例は殆どなく、シュメールのスポーツが葬礼に起因したとは言い難く、こうした儀礼はギリシャ人の宗教観から発生した独特の風習であったことを示唆している。

参考文献

青柳正規 1993「帝国主義と古代美術品コレクション」『ベルリン美術館』角川書店 8－10項。

岡田明子、小林登志子 2000『古代メソポタミアの神々』集英社。

小川英雄 2001「ローマ・ギリシャの宗教」『世界の宗教』自由国民社 352－362項。

川又風山 1988『シルクロード・オアシスと草原の道』奈良県立美術館 204－205項。

真田 久 2002「ギリシャオリンピア競技祭」『スポーツ』近代ヨーロッパの探求8 ミネルヴァ書房 243－270項。

周藤芳幸 2002「ワイン色の海を越えて－紀元前2千年紀の東地中海と東西文化交流への一考察」『西アジア考古学』3号 33－44項。

1997『ギリシャの考古学』同成社。

ジュデチィス・スワドリング著、穂積八洲雄訳 1944『古代オリンピック』NHK出版。

月本 昭男 2001「バビロニア・アッシリアの宗教」『世界の宗教』自由国民社 340－351項。

中原 与茂九郎 1964「ケンギル都市同盟について 初期メソポタミア史の一問題」『史林』47号 93－112項。

西川 亮、後藤 淳 1988『古代オリンピックの旅』協同出版。

ニコラス・ヤルウリス／オット・シミチェク監修、成田十次郎、水田 徹訳 1981『古代オリンピック』講談社。

フェレンス・メゾー著、大島鎌吉訳 1973『古代オリンピックの歴史』ベースボール・マガジン社。

ピエール・レベック著、青柳 正規監修 1993『ギリシャ文明』創元社。

ベラ・オリボバ著、阿部生雄、高橋幸一共訳、岸野雄三監修 1986『古代のスポーツとゲーム』ベースボール・マガジン社。

ロバート・モアコット／桜井万里子 1998『古代ギリシャ』河出書房新社。

前川和也 1989「シュメールの興亡、天災に耐える民」『古代オリエント』河出書房新社 19－80項。

前田 徹 2003 a「シュメール語文字資料から見た動物」『西アジア考古学』4号 31－39項。

2003 b『メソポタミアの王・神・世界観』山川出版社。

松島道也 1974「アルカイク時代」『ギリシャ美術』大系世界の美術5 学研 109－120項。

松波健四郎 1994『古代宗教とスポーツ文化』ベースボール・マガジン社。

水田 徹 1974「幾何学様式時代」『ギリシャ美術』大系世界の美術5 学研 31－35項。

吉川 守 1990「都市文明の原風景」『メソポタミア・文明の誕生』大英博物館 1 日本放送出版協会 8－32項。

Basmachi F. 1976 "Treasures of the Iraq Museum", Ministry of Information Directorate General of Antiquities.

Black J., Cunningham, G., Robson E., and Zolyomi G. 1998 "The Marriage of Martu", The Electronic Text Corpus of Sumerian Literature, Oxford.

Delougaz P. and Lloyd S. 1942 "Pre-Sargonid Temples in the Diyala Region", Oriental Institute Publications, No.58.

Lloyd P. 1978 "The Archaeology of Mesopotamia", Thames and Hudson.

Mathews R. 1993 "Cities, Seals and Writing: Archaic Seal Impressions from Jamdet Nasr and Ur", MSVO 2.

Nemet-Nejat K. 1998 "Daily Life in Ancient Mesopotamia", Green Wood Press, Daily Life through History Series.

Photinos P. 1989 "Olympia", Olympic Publications.

Roaf M. 1990 "Cultural Atlas of Mesopotamia and the Ancient Near East", Oxford.

Steinkeller P. 2000 "Archaic City Seals and the Question of Early Babylonian", in:T.Abusch(ed.), Riches Hidden in Secret Places. Ancient Near Eastern Studies in Memory of Thorkild Jacobsen(2000), 249-258.